

# 經驗医 J・A・エルヴェシウスとルイ十四世治下のパリ

—— 評伝 エルヴェシウス家の人々（その二） ——

永治日出雄

## 第一節 セーヌ河畔と祖父エルヴェシウス

(一)

〔太陽王〕ルイ十四世の勢威が絶頂に達したのは、一六七九年から一六八四年までの時期とされる。一六六一年親政を開始したルイ十四世は、J・B・コルベールに補佐されて重商主義政策を進め、幾多の侵略と戦争により領土を拡大した。オランダとの交戦の結果、一六六八年にはフランドル地方の要地を獲得し、また一六七二年から一六七八年にかけてはオランダ、ドイツ諸侯、デンマーク、スペインの同盟軍と戦い、フランシュ・コンテ地方などを併合する。こうした軍事的栄光を記念するため、パリではサン・ドニ凱旋門とサン・マルタン凱旋門が造られ、ヴィクトワール広場にルイ十四世の巨像も据えられた。一六八四年アカデミー・フランセーズに迎えられた詩人ラ・フォンテーヌは、ルイ十四世の栄光をつぎのように讃えている。

あらゆる事柄における整然たる秩序、叡智、毅然さ、宗教と正義への熱情、秘策と先見、勝ち抜く技倆、戦勝を効果的なものにする手腕、そうした技倆や手腕とは滅多に併立しない謙虚さ、かつまた完璧な君主として要件。これら無数の道徳的・政治的美点を、どう私は詳説すればよいでしょうか。これらすべてに人格の威厳と高雅さが伴っています。(中略)

摂理はルイ大王の御世のため有能な人材を用意し、君主の功績を顕彰させる、と人々は申します。数多の戦勝が大王を不滅の存在にしたとはいえ、英雄たちの名声を広げるのに、学芸の神々がはたして不要でしょうか。トラヤヌス帝のため小プリニウスがなにもなかったでしようか。「キケロの作品」「リガリウスとマルセルスのための祈禱」によってカエサル13の仁慈が、いままも称讃されていないでしようか。

一六六一年にオランダのハーグで生れたジャン・アドリアン・エルヴェシウスは、ライデン大学で医学を学んだのち、一六八四年フランスに帰化した。<sup>14</sup>これが哲学者クロード・アドリアン・エルヴェシウスの祖父である。(Jean-Adrien HELVETIUS, 1661-1727. 以下)の人物を祖父エルヴェシウスまたは経験医エルヴェシウスとも呼ぶ。)

ジャン・アドリアン・エルヴェシウスが初めてパリを訪れたのは、一六七九年と思われる。ヨーロッパ随一の都邑で家伝の秘薬を売り、財富への道を拓こうとしたが、所持金を使い尽くして舞い戻る。しかし、彼の父親ヨハン・フレデリック・ヘルヴェチウス (Jean-Frédéric HELVETIUS 1625-1707) は、こうした不首尾にすこしも怯まず、(豚石)などほかの秘薬を息子に授け、再度フランスへ旅立たせた。(以下この父親を曾祖父エルヴェシウスとも呼ぶ。彼が統領オラニエールナッソウ公家の侍医長を勤め、著名な錬金術師でもあることは、本稿(その一)で詳しく述べた。)今回は医者として箔を付けるため、まず、シャンパーニュ地方の中心ランスにジャン・アドリアンは留学する。こうして彼は一六八〇年四月三〇日に医学博士の称号を取得し、ふたたびパリの地を踏んだ。<sup>15</sup>

まもなくジャン・アドリアンはシテ島サン・ルイ街に住みつき、〈明星亭〉という看板のもとに活動を始めた。現在シテ島の西南端はオルフェーヴル河岸と呼ばれているが、革命期まではその東側半分がサン・ルイ街と名付けられていた。<sup>6</sup>パリの市の発祥はセーヌ河を利した水運と交易に存し、ヨーロッパ各地からの物資だけでなく、アジアやアメリカの産物もル・アーヴルなどを經由してそこに運ばれる。なかでもシテ島周辺は早くから政治・経済・文化の中心をなしたが、一六〇九年のポン・ヌフ橋完成によって活気と繁栄を倍加させた。広壮で堅固な橋上には数多の書店と小屋が並び、珍奇な品を漁ったり、見世物に興じたり、セーヌの兩岸を望見する老若男女でたえず賑わった。<sup>7</sup>

十七世紀のパリには諸国各地から〈いかさま医者〉や〈秘薬調合師〉が蝟集していた。彼らの大半は医学の素養に欠ける修道士や接骨師や産婆であるが、しばしば外科医、歯医者、植物学者、香辛料屋、薬種商などもこれに含まれた。こうした〈いかさま医者〉たちは好んでポン・ヌフ橋一帯に屯し、種々様々な薬液や軟膏を売り捌いた。とくに人気を呼んだのは、C・コントウギが調合した〈オルビエタン〉で、この解毒剤を販売する豪華な芝居小屋には、客寄せに一群の役者と香具師が配備されていた。また、コントウギの商売敵としてM・バリーもポン・ヌフ橋袂のドフィーヌ広場に見世物小屋を持ち、火傷の特効薬を売った。<sup>8</sup>フランス座の俳優として人気を集め、また多くの諷刺喜劇を書いたF・C・ダンクールは、『いかさま医者バリー』において彼の口上と生態を再現する。

紳士淑女諸君。これなる拙者こそ世界最高の人物、この道における無二の不死鳥、医学の亀鑑、ヒポクレテス直々の後継者にして、彼の金言の相続者、自然の探究者、病気の征服者、あらゆる大学医学部の厄介者でござる。そして、諸君の眼前に控える拙者こそ、体系的、ガレヌスの、ヒポクレテスの、金術的、経験的医家でござる。(中略)

紳士淑女諸君、拙者こそ高名なメルキゼデック・バリーでござる。天にひとつの太陽しかないように、地に

はひとりのバリーしかいない。(中略)

拙者がどんな治療を行なったと訊くのか。タイへ行き、拙者について尋ねるがよい。白象の疝痛を癒したと告げるであろう。イタリアへ手紙で問い合せるがよい。左乳房の癌を治療して、ラグース共和国の女性を救ったことが判る。天然痘の新たな流行から救ってくれたのはだれか、とムガル皇帝に質問するがよい。バリーにほかならぬ。アタバリツパ王子のため虫歯を十一、魚の目を十五取ってやったのはだれか。高名なバリーでしかありえない。

白髪を黒くし、洗札証書を否認できる日本産香油、鏡のように顔色を均一にし、天然痘によるあばたを消すペルー産軟膏、眼を大きく、口元を可愛くし、低すぎる鼻を隆起させ、高すぎる鼻を押し縮める中国産第五元素、そしてまた美の補完物とも、容貌の修理人とも、天賦ならぬあらゆる魅力の秘訣、とも呼びうる特製の靈薬を、拙者は携えている。

こうした人物のなかには法螺吹きや詐欺師も多く、無資格者の医療と売薬の誇大な宣伝は法律によって禁止されていた。とはいえ、フランスでは大革命の時代まで専門的な医学と民間医療がなお分化せず、外科医、歯科医、眼科医などはまともな医者とみなされていない。パリの民衆は修道士や接骨師の治療を大いに頼りとし、国王をはじめ高位高官もときには(経験医)や(秘薬調合師)を受け入れた。

一六七八年ふたりのカプチン会修道士が、エジプトからパリに来了。それは宗教的な用務を帯びたルソー神父とエニャン神父であったが、まもなく独自の医療によって多くのリウマチ患者や喘息患者を治療し、ルーヴル宮のなかに居室を与えられる。アンバリッドの傷病兵も彼らの解熱剤でたちまち元氣となり、持病を癒されたコンデ公やセヴィニエ侯爵夫人は彼らを厚く遇した。しかし、ふたりの修道士はその翌年本来の用務を終えると、惜しまれつつフラン

スから去った。<sup>11)</sup>

ジャン・アドリアン・エルヴェシウスも（いかさま医者）または（経験医）のひとりと当初みなされていた。彼が住みついたサン・ルイ街は、ボン・ヌフ橋の袂にあり、民間医療や秘薬販売に絶好の場所である。オランダから来た余所者にすぎず、医者らしからぬ風貌であることが、胡散な男という印象を与えたかもしれない。ラフォン著『名門エルヴェシウス家―国王用命の治療―』では、初期のジャン・アドリアンを描いた人物としてJ・ベルニエが紹介されている。一六九五年刊行の『医学・医家年代記』において、ベルニエは（いかさま医者）エルヴェシウスを辛辣に論評した。

風変りな医者を崇めるパリは、頬髭も付けぬ優男を眺めるや、自国のいかなる学者に対するよりも易々と彼に市民権を授けた。こうして遠くから運ばれたというだけで、キナ樹皮粉末の変造、僅かばかりの阿片、ある種の鉱水が秘薬としてまかり通った。

このいかさま医者は貴族の娘、D・・嬢の関節に阿片の溶液を擦り付け、彼女を永眠させてしまった。

また、よく知られているように、徴税総括請負人M・・氏の令嬢が天然痘を病んだとき、彼は発汗によって治せるし、病気による痕跡や傷痕も防げると主張した。こうした目的で令嬢は燈火のなかに置かれ、「出してよ！」と幾度も叫び、死んでいった。<sup>12)</sup>

『医学・医家年代記』ではすでに著名となったジャン・アドリアンだけでなく、当時の高名な臨床医がつぎつぎと糾弾されている。これを書いたベルニエは、医家として不遇であり、上流人士に強い憤懣と嫉妬を抱いていた。彼の暴露的な記述は世の耳目を驚かせるものの、その大半が確乎たる根拠を持たぬ、と定評ある伝記辞典の編者J・ミショーは判断する。<sup>13)</sup> そうした嫉妬とともに（いかさま医者）や（秘薬調合師）への偏見がベルニエを捉えていること

は確かである。

ついでラフォンが挙げるL・モレリ編「大歴史辞典」の記述は、ジャン・アドリアンに対してはるかに好意的である。この記述によれば、パリにおいてまもなく彼の卓越した医師が発揮され、上流人士との繋がりも増していく。なかでもショールヌ公爵夫人によって彼はコルペール一家に推挙され、やがて栄達への門が開かれる。

首都に到着するや、エルヴェシウスは奇蹟的な治療を為し遂げた。たとえば、ポルドー高等法院評定官シャパーヌ氏であつて、四人の医者に見放された彼が、エルヴェシウスから施された秘薬により健康を回復した。

彼はサン・シュルプス神学校のフクレ氏や一七三四年になお存命している海外布教団長ブリザシエ氏を治療させ、またいくつかの医療によつて多大の榮譽を授けられ、ショールヌ公爵夫人の信頼をも得た。

さて、サン・ルイ街に設けられた〈明星亭〉は、ジャン・アドリアンの活動の拠点であつたが、隣家にひとつの美しい星、ジャンヌ・デグランジュ (Jeanne DESGRANGES) が隠れていた。彼女は〈正義号〉船長ルイ・デルベの未亡人であり、やがて七歳年下のジャン・アドリアンと愛し合うようになった。〈正義号〉は遠洋航海の船舶であつたらしく、水運と交易に便利なシテ島に住んだと思われる。この未亡人との間に男の子も産まれたが、オランダにいるジャン・アドリアンの両親は、そうした結婚を許さない。しかし、民事代官の保証のもとに一六八四年八月三日、ふたりの結婚式がシャトトレのサン・バルトレミー教会で行われた。挙式に先立って同年三月彼はフランスに帰化し、カトリックに改宗する<sup>15</sup>。その直後にナントの勅令が廃止され、多くのプロテスタントが国外に脱出した。

ジャンヌと結婚したジャン・アドリアンのもとに、さらにひとつの幸運が訪れ、セーヌ河畔に終生留めることとなる。ブラジル原産の植物から特效薬イベカ吐剤を抽出した快拳がそれである。

ヴェスコ・ダ・ガマによる希望峰回航のあと、第二次インド行き船団を編成したP・A・カブラルは、リスボンから大西洋を南下し、はからずも南米のポルト・セグロに到着した。こうして一五〇〇年にヨーロッパ人はブラジルを発見したが、そこにはインカ帝国のような黄金郷もなく、食人種の住む原野としてながく敬遠した<sup>15</sup>。しかし、ユグノー弾圧の難を避け、一五五五年に入植したフランスのJ・レリーは、ブラジルの自然と産物を称讃し、いくつかの主要な樹木や根菜を紹介した。

次のように述べておきたい。すなわち、かの国の森や野を行きつ戻りつ私が綿密に観察したところに従えば、所々に生えているすべりひゆ、バジル、羊歯の三種の草を除くと、ヨーロッパのそれと違いのないような樹木、草本、果実は一つとして目にしなかった、と。

そんなわけで、神の恵みにより見るをえたかの新世界の姿がわが眼前に思い浮ぶたびに、そしてあの清澄な空気、多種多様な動物や鳥、美しい樹木や植物、甘美極まる果実、要するにあのブラジルの大地を飾るすべてに思いを致すたびに、私の脳裏には立ちどころに『詩篇』第一〇四番〔創造の偉大さを歌う〕のあの予言者の叫びが甦<sup>17</sup>えるのである。

アジアへの進出と交易で覇権を握ったオランダ連邦共和国は、一六二一年に西インド会社を設立し、南米への進出を本格化した。ポルトガルと抗争しつつ、オランダは一六三〇年ブラジルで植民地経営の拠点を獲得し、やがて名門オラニエーナツソウ公家のひとり、J・M・ナツソウシールヘンが総督として赴任する。彼は物資・食糧の確保、砂糖経済の促進、公安・衛生の改善など開明的な政策を展開し、三十年戦争による難民をはじめ、沢山の職人や商人も

ヨーロッパから移住した。学芸の進歩と信仰の自由を尚ぶ総督の宮殿には、多くの学者や芸術家が招請され、首都マウリシアには図書館や天文台が建設された。<sup>18)</sup>

一六三八年にオラニエーナツソウ公家の侍医G・ピゾンは、ブラジル総督に随行してアメリカ大陸を旅した。彼は博物学者としても著名であり、旅行を共にしたドイツの学者G・マルグラーフと共著『ブラジル博物誌』をアムステルダムで出版する。彼らの報告によれば、ある樹木が数種の病氣、とりわけ赤痢の治療に卓効があり、原住民の間で薬用にされている。それはブラジルで「バオヤ」と呼ばれるが、ピゾンとマルグラーフによって学名をイペカキユアナ、すなわち「縞模様の芳香性樹根」と定められた。<sup>19)</sup> イペカキユアナの創案者ジャン・アドリアン・エルヴェシウスも、一七〇三年刊行の名著『とくに頻発する病氣とそれへの卓効ある療法』でこうした起源に触れている。

アムステルダムの高名な医者ピゾンが『ブラジル博物誌』で初めてイペカキユアナの樹根について語った。これの形状を示すだけでなく、人体への効力や生育する場所についても彼は語っている。だが、病氣を治すため、この植物を実際どのように用いるか、一言も述べていない。<sup>20)</sup>

イペカキユアナの採集は原産地でもかなり困難であり、ヨーロッパでは植物学者もほとんどその形状や効能を知らなかった。海軍長官を兼務するコルベールとその子息セニユレー侯爵によって一六七二年フランス海軍が確立され、同じ年に医家ルグラが南米からイペカキユアナの樹根を大量に持ち帰った。彼はそれを知人や学者に見せ、パリの〈秘薬調合師〉クラクネルに大半を預けた。<sup>21)</sup> 一流の化学者として知られ、クラクネルの同業者でもあったN・レムリは、『薬草薬物辞典』において左記のとおり記述する。

〔イペカキユアナは〕筆のように管状をした太く短い樹根を持つ。それは乾燥させてアメリカの若干の地方から私たちのもとに運ばれる。(中略)

イベカキユアナは原産する本国でも滅多に見かけない。それを採取するのは至難の業であり、鉾山に繋がれる囚人がそうした労働のため使われる。(中略)

アメリカを三度旅行した医家ルグラが、初めてイベカキユアナをフランスにもたらした。ブルドロ神父の屋敷で彼はそれを私たちに示し、また私が担当する化学講義にもそれを見せにきた。私もその樹根を彼から少量貰ったが、特性をあまり教えてくれないので、いまでも私の薬品棚にある。<sup>22</sup>

クラクネルは(秘薬調合師)の同業組合でも重要な役割を勤め、特権的な商人やパリ大学神学部にも抵抗した。だが、彼はイベカキユアナを薬用植物として売り出し、過度の投薬によつて相次いで不幸な結果を惹き起す。こうしてクラクネルは信用を失墜し、イベカキユアナもほとんど忘れ去られた。<sup>23</sup>

しかしながら、アメリカ大陸との交易が拡大するにつれて、タバコやコーヒーのほか、梅毒に対するクワヤック、創傷に対する安息香チンキ、黄熱病に対するヤラツバなどさまざまな新薬がヨーロッパに導入された。なかでもキナ樹皮が薬用に供されたことは、ガレヌスの体液説や排泄説を根底から覆し、伝統的な医学との衝突を惹き起した。<sup>24</sup>

キナ樹皮は南米原住民の間で古来用いられていたが、一六三八年にペルー総督夫人のマラリヤ治療において卓効を示した。まもなくこの薬用植物は総督の侍医によりスペインへ運ばれ、とりわけマラリアの特効薬としてイエズス会士が各国に伝播する。しかし、なんらの排泄もなしにキナ樹皮の服用が患者を治療に導くため、ガレヌスの学説を絶対視するパリ大学医学部は、そうした療法を邪説として排斥した。また、ときに危険を伴い、あまりに高価なキナ樹皮をめぐって、オランダ、ドイツ、イギリス、イタリア、等々でも賛否両論が激しく闘わされた。<sup>25</sup>

イギリスでキナ樹皮をとくに賞用したのは、市井の医師T・シデナムである。医学教育も充分でなく、学問的權威とも無縁であった彼は、種々の病気を綿密に観察し、十七世紀を代表する臨床医家となった。<sup>26</sup>シデナムの影響を受け

たタルボアは、一六七九年キナ樹皮を携えてイギリスからパリへ移住し、熱病に対する治療で評判を高める。彼は太陽王の王太子ルイ・ド・フランスをも頑固な熱病から救い、秘薬の公表と引換えに金貨二千ルイと騎士の称号を授けられた。新しい療法にしばしば強い関心を寄せるセヴィニエ侯爵夫人は、一六八〇年一月八日付書翰で最愛の娘にこの出来事を伝える。

騎士殿（タルボア）について申せば、ヴェルサイユに戻られたことを、私は嬉しく思います。

重病である若君からいまや離れることはできません。王太子の熱病と下痢を四日以内に治癒させる、とこのイギリス人はすすんできつぱり国王に約束しました。だから、それを成就しなければ、人々は彼を窓から放り出すでしょう。しかし、これまでに診察してきたすべての患者に対するのと同じく、王太子についても彼の予言が真実のものとなれば、医神アスクレピオスに等しい神殿を造ってやらねばならないでしょう。モリエールが死んだのは残念なことです。妙薬を差し出せずに苛立つ〔侍医〕ダカンや、こうした身分の低い者の経験、成功、神の如き予言に圧倒されるすべての医家を観て、モリエールなら素晴らしい舞台を作らうでしょう。国王は彼に眼前で薬を調合させ、王太子の健康を委ねました。王太子妃のほうはすでに恢復され、ブラモン公爵がダカンの鼻先で昨日つぎのように言いました。

タルボアこそ死に打ち勝つ

ダカンは死を防ぎ切れぬ

王太子妃が恢復に向かわれる

歌おうではないか！

宮廷ではこんな風に語っています。騎士殿は大変面白いお話を沢山私にしてくださいました。それらはここに

書き切れません。この地に留まることに大きな恩恵があり、隠遁したときには得られぬ交遊や機会が与えられる、とあなたに申したいのです。<sup>28</sup>

イギリスの哲学者J・ロックは、シデナムの医学的な研究に協力し、その功績を高く評価していた。思想形成の途上にある彼は、一六七五年から一六七九年までフランスに滞在し、タルボアの評判に刺激されてキナ樹皮への関心を強める。故国にいるシデナムとの文通やライデン大学の泰斗ジベリウスとの会見では、このペルー産植物が重要な論題とされている。<sup>29</sup> なお、ロックの『日誌』に含まれる医学的記述は、キナ樹皮をみずからしばしば使用したことを語る。つぎに抜粹するのは、彼の診療記録の一端である。

【一六八一年六月二二日】

ペルー産樹皮三ドラクマ、中国産樹皮一ドラクマ、鋼鉄粉末三分の一ドラクマを与える。こうしてワトソン博士も悪液質の身体にできた〈おこり〉を根絶させた。

——患者ホッグス氏に関して——

【一六八一年九月十日】

痛風は栄養不良による疾患であつて、ゆっくり漸進的に蓄積し、最後には間歇的な熱病のように激烈な発作を惹き起す。したがつて、これを治癒させるには、ペルー産樹皮を用いるか、食物の消化と吸収を促す薬を与えるかといふであろう。

——患者A E氏に関して——

【一六八一年十月三日】

こうした間歇的な熱病は、たとえ進行中であつても、キナ樹皮により治癒できる。ただし、昼間は患者をベッ

ドに寝せず、身体を立たせることが必要であるが……。つねに横臥していると、いつも発熱する。

——患者 A E 氏に関して——<sup>30)</sup>

伝統的な医学の圏外で営み、新しい療法の採用に積極的なジャン・アドリアン・エルヴェシウスが、このペルー産植物に冷淡であるはずはない。彼が公にした最初の冊子はキナ樹皮の用い方に関するものである。<sup>31)</sup> つぎの一文から明らかかなように、キナ樹皮の活用はジャン・アドリアンの主要な療法のひとつであった。

イギリス人の騎士タルボアがフランスで初めてキナ樹皮の煎じ薬を用いたが、彼は必要に応じてコントライエルブの根七ドラクマ、あるいは阿片一粒と混合し、ときには高熱を早く下げするため、それを沸騰させた。(中略) 熱病の治療のためキナ樹皮ほど効果的かつ迅速な薬は、これまでに存在しなかったとすら言えよう。ただし、投薬に先立って患者に下剤と瀉血を充分施すよう配慮すること、また彼らに食事療法を正しく守らせることが大切である。<sup>32)</sup>

ペルー産植物が特効薬として確立される道程自体も、(経験医) ジャン・アドリアン・エルヴェシウスを大いに啓発したに違いない。こうしてキナ樹皮の開発とともに十七世紀薬学史を飾るイペカ吐剤の創案は、成功の条件を次第に醸成されつつあった。

## 第二節 祖父エルヴェシウスとイベカ吐劑の創案

### (一)

美しい未亡人と結婚してしばらくのち、ジャン・アドリアン・エルヴェシウスは、ひとりの富裕な藥種商と知りあつた。重病に陥つたこの商人は、パリ大学医学部の權威ダフォルティによつて救われ、恩人への感謝としてイベカキュアナの樹根三キログラムを進呈した。しかし、用い方も判らぬダフォルティは、風変りな贈物を輕蔑し、貨幣による高額な謝礼を求める。ブラジル産植物はすげなく藥種商に返され、やがて知人ジャン・アドリアンへの贈物とされた。<sup>33</sup> こうしてジャン・アドリアンのもとでイベカキュアナの特性が吟味され、医学的な成功への道が拓かれた。人体への作用を調べ、適切な用量を慎重に定めたあと、細民の血便や赤痢を治すのに、彼はそのブラジル産植物を試用する。なお、オランダに住む親族が、すでにイベカキュアナの用法を知つており、幸運の糸口を掴んだ彼に秘訣を伝えたとも言われる。<sup>34</sup>

新しい療法の発見を確信するや、ジャン・アドリアンはヨーロッパ諸国の港湾に陸揚げされるイベカキュアナをすべて買い占めた。学術的な才能や臨床的な手腕だけでなく、好機を機敏に捉え、将来の發展に備える商才が、彼の一家には潜んでいる。こうした取引のため彼はゲルニエという老練な帽子商人に協力を求めた。<sup>35</sup> なお、海運や交易に関しては妻ジャンヌやコルベール一家からも情報を得たであろう。一六八六年ジャン・アドリアンは新藥創出の告知に踏み切り、彼の依頼によつて左記の広告文がパリ全市に貼り出された。

オランダ人医家エルヴェシウス氏は、長期の研究と深遠な省察のあと、血便に対して真に卓効ある物質を発見し、またもつとも重要な事柄として、その適切な用法をもつてに見出した。したがって、同氏の開発したブラジル産粉末のお陰で、赤痢が制圧されたこと、同氏が\*\*街\*\*番地\*\*亭で嘗み、同氏の秘薬が穏当な値段で分ち与えられることを、ここで公衆に告げ知らせる。

薬剤の広告は当時法令によつて禁止されていたが、それを遵守する薬種商や〈秘薬調合師〉は稀であつた。ジャン・アドリアンの貼紙はただちに反響を呼び、〈明星亭〉には数多の患者が殺到する。そして、告知どおりの薬効が確認できると、新薬開発の噂はパリの市井からヴェルサイユ宮にまで拡がった。

折しも宮廷では王太子ルイ・ド・フランスが、赤痢のため重態に陥り、ルイ十四世の首席侍医A・ダカンも苦境に立つていた。モリエールやセヴィニエ夫人に揶揄されるダカンは、王太子や王妃の侍医を勤めたあと、一七七二年からヴェルサイユの医官として最高の地位にあつた。平素から彼は〈経験医〉や〈いかさま医者〉に反感を抱いていたが、事態の深刻さに迫られ、世評高いジャン・アドリアン・エルヴェシウスにヴェルサイユへの出仕を命じた。

このとき慎重なジャン・アドリアンは、パリ市内の病院で試行的な治療をしたいと希望した。しかし、王太子の病状は一刻の遲滞をも許さず、彼はただちに王宮へ招かれる。彼の独自の療法によつて王太子の苦しみは軽減し、やがて快癒へと向かつた。以下はこの出来事に関するモレリ編『歴史大辞典』の記述である。

この時期に王太子が赤痢にかかつたので、当時の首席侍医ダカンはエルヴェシウスのもとに使者を送り、彼の医薬が真に役立つか否かを問ひ糾した。役立つ、とエルヴェシウスは確言した。しかし、その薬効を覩てもらうため、あらかじめ病院で実験をしたいと申し出る。彼がダカンに打ち明けたところでは、その医薬はイペカキユアナにはかなならぬ。首頭侍医はその用い方を知らなかつた。ラ・シエーズ神父も彼のもとにペーズ

神父を派遣し、秘密の厳守を約束しつつ、医薬を差し出すよう頼んだ。エルヴェシウスは同意した。彼のさまざまな秘薬、とりわけイベカキユアナが驚異的な効果を示したので、ラ・シエーズ神父は責務としてこのことをルイ十四世に話した。<sup>(40)</sup>

ジャン・アドリアンによる奇蹟的な治療は、宮廷全体を安堵させるとともに、赤痢など難病の治療に光明を投げかけた。主著『とくに頻発する病氣とそれへの卓効ある療法』において、彼はイベカ吐劑創案の意義と王太子診察の経験をつぎのように語る。

下痢、血便、赤痢はどの時代においても非常に危険で、癒し難い病氣とみなされてきた。なかでも赤痢はつねにもつとも怖れられた病氣である。

頻繁な便通を生じ、出血と化膿と痛みを伴う下痢が、赤痢と呼ばれる。特効ある療法が見出されぬかぎり、この疾患が終息するのは、あらゆる階梯を辿った末である。すなわち、まず粘血性の物質、ときにさまざまな色を帯びた脂肪状物質が現れる。ついで膜状の細い繊維が見られる。さらに病氣が進めば、色々な種阜が吐き出される。こうした病狀がながく続くと、苦痛は絶え難いものとなり、患者の辛抱も限界に達する。自然によって治療する患者も若干いるが、医薬のお陰で救われる患者は少い。なぜなら、ある人々は腸内の炎症と壞疽によって命を奪われ、ほかの人々は緩慢な発熱を伴う潰瘍により、一層悲惨な最期を遂げる。そうした潰瘍は氣づかれぬまま徐々に身体を衰弱させ、大抵は不治の病苦へと陥れるからである。このような病氣の進行を止めるため、医家も無為無策ではありえず、多くの有能な人士が医術と経験に照らし努力している。瀉血や浣腸を処方する人もあれば、麻酔薬、吐劑、下劑、収斂劑を使用する人もいる。これらいかなる療法も成功することは稀であり、さまざまな方策にもかかわらず、こうした病氣の伝染によって軍隊全部が壞滅することさえ見受

けられる。この種の疾病すべてに對して、卓効ある藥物の用法をついに私は発見した。諸王のなかでももつとも偉大な国王が、私に称讚を賜つたのである。その際に国王は調合の秘訣を教えるよう求められ、またそれが公になれば、臣民にも恩沢が及ぶと明察され、金貨千ルイを賞与として私に下賜された。(中略)

各種の下痢を癒す場合に卓効を示すだけでなく、嘔吐させる必要がある場合にも、これがかならず役立つことを、私は体験した。適切な用量を定め、激烈な催吐作用を緩和し、飲み易くなるよう配慮しつつ、イペカキユアナをむしろ下剤として用いることに、私はとりわけ専念したのである。(中略)

そのほか赤痢に苦しむ患者すべて、また種々の下痢、すなわち胆汁や脂肪の過多、さらには冷え腹やしぶり腹で苦しむ患者すべてが、以下に述べる処方に従えば、美事に快癒する。不消化性下痢や漿液過多の下痢、つまり帯緑色、悪臭、水っぱさ、極度の充満を伴う排泄のなかで、この薬剤で癒されぬ疾患は存在しない。<sup>(4)</sup>

## (二)

つとにルイ十三世は秘伝薬や民間療法の奥義を買ひ取るため、相当の金額を毎年内帑金に計上した。これらの薬剤は調合の仕方も公表され、国王の侍医をとおし貧民へ無償で配分される。太陽王もキナ樹皮など新薬の採用に積極的であり、国力の充実や民心の掌握という観点からコルベールがそれを支援した。<sup>(4)</sup>

王太子を治癒させたジャン・アドリアン・エルヴェシウスの治療は、ルイ十四世の関心を強く惹きつけた。首席侍医ダカンも駐ポルトガル大使からイペカキユアナを入手していたが、その用法を知らなかった。国王の信頼篤い聴罪師F・A・ラシェーズ神父は、ジャン・アドリアンにもタルポアと同じような処遇を与えることを進言した。<sup>(4)</sup>

イカベ吐剤の処方公表するに先立つてジャン・アドリアンは、パリ市内の病院で実験的な治療を行ない、自己の

療法を公的な検証に付すことを希望した。これを受けてルイ十四世は、一般病院とパリ施療院の管理者に左記の親書を送り、新薬の実験のため万全の便宜を与えるよう求める。<sup>44)</sup>

〔国王の親書〕

国王の名において

ヴェルサイユ、一六八七年七月一日

慈み深き朕は、医家エルヴェシウス殿が血便および赤痢の治療のため特効薬を保持すると聞き及び、病院の貧者と船舶の乗組員を救うため、それを役立てたいと念願する。したがって、医家エルヴェシウス殿にそのような病気で苦しむ人たちを一般病院で診察させること、そうした目的のためそこへ自由に出入りさせること、またその特効薬を活かすためあらゆる手段を利用させることを、朕は要望し、かつ命令する。<sup>45)</sup>

パリ施療院（オテル・ディユー）はフランスにおける最古かつ最大の公共医療機関であり、その起源は七世紀のクローヴィス二世に遡る。十三世紀にノートル・ダム寺院が造営されたあと、それはシテ島の東南部に再建された。後身である現在の市立病院は、バルヴィ広場の北側に聳えるが、施療院は広場の南側に位置し、プチ・ボン橋によってセーヌ左岸に直結していた。<sup>46)</sup>

エルヴェシウス一家が以後ながく係りを持つパリ施療院は、サン・ルイ街の〈明星亭〉から至近の距離にあった。そこでは一般の患者に対する治療のほか、ときに試行的な実験も行なわれた。そうした努力の成果として一六八一年にキナ樹皮の採用も決定されている。<sup>47)</sup>

一六八七年一月一七日に国王の親書があらためて届られ、パリ施療院で赤痢の患者三名がジャン・アドリアンの診察に委ねられた。これらの患者、アベル・ノワール、シャルル・レギエ、エチエンヌ・シャノンが国王の経費によ

り特別の病室で看護を受ける。彼らをジャン・アドリアンは数カ月にわたって入念に治療し、輝かしい医学的成功を収めた。<sup>48</sup>しばしば引用してきた彼の主著には、どのようにイベカ吐剤を赤痢患者へ投薬したかが語られている。

第一にはこの特効薬の一服を淡いスープか赤葡萄と一緒に飲んでもよい。こうしたスープを飲んだあと四時間、さらにはその日が終るまで、静かにしているように。どろどろした苦い胆汁が赤痢を普通惹き起すけれども、こうした薬は胃や下腹部からそれを除去してくれる。(中略)

患者がまだ苦痛を訴えたり、頻繁に排泄する場合、同じ特効薬を翌日も繰り返す。だが、容態が良くなったときには、体力を消耗しないよう、一日ないし二日の間隔で服用させる。二服目で治らないならば、必要に応じて三服目、四服目へと進む。(中略)

赤痢が高熱を伴うとき、出血が異常であるとき、苦痛が耐え難いときには、一度か二度瀉血を試みるがよい。<sup>49</sup>高熱を下げるだけでなく、脈管の充満を和らげ、腸部へ血液を流入させないために、瀉血はきわめて必要である。

コルベールの遺児であり、海軍次官を勤めるJ・B・C・セニユレー侯爵は、ルイ十四世からパリ治療院での実験について報告することを任せられた。兵力の増強や交易の発展を念願する国王は、海軍と船団における伝染病に対処するため、セニユレーを選んだと思われる。侯爵は治療院へ権威ある医家二名を派遣し、実験の立会いと検証を命じた。<sup>50</sup>以下はそれらの医家と首席侍医ダカンによる検証報告書である。

〔検証報告書〕

われら国王顧問官および国王首席侍医はつぎのとおり天下に確証する。すなわち、勅命によって派遣された兩名、パリ大学医学部の医家レジエおよび故コルベール殿の外科医ガストリエの立会いのもとに、医学博士ア

ドリアン・エルヴェシウスによる実験的治療は、一般病院、パリ治療院で実施され、数件の治療すべてが美事に成就したことが確認された。この結果エルヴェシウスは赤痢等への特効薬販売に関する特認状を国王陛下より授けられる。

以上の検証が今後尊重されることを要望する。

ヴェルサイユ、一六八八年九月四日

ダカン

レジエ

ガストリエ<sup>(5)</sup>

(署名)

こうしてイペカ吐剤の薬効が公的に確認され、創案者ジャン・アドリアン・エルヴェシウスは褒賞一千ルイだけでなく、専売特許権をも獲得した。以後イペカ吐剤は伝染病の特効薬として公共の医療機関だけでなく、陸軍や海軍でも好んで使用される<sup>(6)</sup>。かつて曾祖父エルヴェシウスは錬金術に財富への夢を託したが、学術的な発見によってその一家に莫大な収入が約束されることとなった。

〔専売特認書〕

可能なかぎりあらゆる方策によって、わが王国を繁栄させたいと、つねに朕は念願しているので、あらゆる職業の傑出した人物や有能な人材を、朕の恩沢によってあらゆる地方からここに招き寄せることに、とりわけ心を用いている。このような見地から朕は、フランスに帰化した医学博士アドリアン・エルヴェシウスが、わが臣民の大きな利益となる美事な医学的発見をいくつか為し遂げ、もつとも危険な病気にも貴重な救済の手を日々差し伸べつつ、下痢、血便、赤痢をまさしく根絶させる特効薬をも、最近発見したとの知らせを受けた。

したがって、麗しきパリの一般病院および施療院において、もつとも絶望的な疾患に襲われた患者すべてに、さまざま治療を試みるよう、朕は彼に命じた。(中略) 以上のような理由によって朕は、臣民の福祉に寄与する新たな探究を促進するため、エルヴェシウス氏にわが仁愛の証左を示し、未来に向けて激励したい。したがって、わが格別の恩恵、広大な権力、王者の権威に基づき、朕直筆の署名入り特認書でもって、同氏に以下の権限をすでに授け、いま改めて付与する。すなわち、当該特効薬に自家の紋章を印し、大量であろうと小分けしようと、独占的に売り捌き、わが軍隊や公衆に配分することを許す。ただし、ひとりの患者を治療させるに必要な量を単位とし、それぞれ金貨三ルイの値段と定める。また、今後継続的に一五年間わが王国や朕に服する諸地方、諸地域、諸領地に、下痢、血便、赤痢の特効薬を普及させるよう、適当と思われる人物を雇用し、販売や小売を代行させることも認められる。なお、患者の治療と公衆の利益という観点から、特効薬を調合したり、他の療法を準備するため、あらゆる溶炉や実験室を自宅等に備えることも許される。同氏以外のあらゆる人物に対しては、特権的な医家、薬剤師、外科医、薬種商のどれに属し、いかなる地位や資格を持つにせよ、当該特効薬の販売や配分を行なうこと、また軽減、補正、増強という口実でその変造や偽造を企てること、今後継続的に一五年間嚴重に禁止される。(中略) 以上朕の欣快とするところである。

ヴェルサイユ、

恵みある一六八八年、わが統治第四六年 八月二一日。

ルイ(署名)

## 補遺

本稿の論述を補足するため、イペカキュアナおよびイペカ吐剤に関する現代の植物学的・薬学的記述をここで紹介する。『日本薬局方』には初版以来トコン（イペカキュアナ）とトコン末（イペカ吐剤）の項目が組まれている。

### A イペカキュアナに関する「原色百科 世界の薬用植物」の記述（抜粋）

*Cephaelis ipecacuanha* (Brot) A. Rich.

アカネ科 (Rubiaceae)

トコン (吐根)

イペカキュアナ (*ipecacuanha*)

【特徴】 分枝叢生する小低木。地をはう繊維状の根は初めは滑らかであるが、次第に太くなり、「数珠状の」環紋がある。茎は根茎に連なり、滑らかで、稜があり、緑色を呈し、高さ三〇cmになる。卵形、全縁の葉をわずかにつける。頂生の単一の花柄につく頭状花序に白い花をつけ、冬の終わり頃から早春にかけて開花する。暗紫の果の房をつける。

【分布】 ブラジルに固有である。その他の地域に導入されている。湿潤な森の日陰に群生する。

【栽培】 野生植物。ブラジル、インド（ベンガル）、マレーシア、ビルマで栽培される。

【用途】 乾燥した根を催吐薬とする。効果の強い去痰薬である。急性およびまん性の気管支炎に用いられる。ア

メーバー赤痢で囊腫の形成を予防する。急性赤痢に有効であり、発汗剤としても有効である。

【禁忌】 多量に服すればすべての胃腸系を刺激し、激しい嘔吐、下痢を起す。粉末は皮膚や粘膜を刺激しくしゃみ、咳の原因となる。使用は医師の指示による。

(出典：マルカム・スチュアート原編、難波恒雄編著「原色百科 世界の薬用植物」エンタプライズ、一九八八年。第二巻、一〇二—一〇三頁。)

## B 「日本薬局方解説書」におけるイペカキユアナおよびイペカ吐剤に関する記述(抜粋)

トロン、IPECACUANMAT RIDIX

吐根 Ipecac

本品は *Cathartes ipecacuanha* A. Richard (Rubiaceae) の根である。

本品は定量するとき、エーテル可溶性〔エメチン ( $C_{12}H_{10}N_2O_4$ : 480.65) として〕二・〇%以上を服務。

【性状】 本品は円柱形で多くねじれて屈曲し、ときには分枝する。外面は暗灰かっ色を呈し、長さ三—一五cm、径約五mmで、皮部は環状—半環状に肥厚して密に輪節状となり、部分的にやや平滑である。これを折るとき、皮部は木部からたやすく分離し、その横断面は灰かっ色で、木部は淡かっ色を呈する。皮部の厚さは肥厚では直径の約2/3に達し、平滑部で直径の約1/9である。

本品はわずかに特異なにおいがあり、その粉末は鼻粘膜を刺激し、味はわずかに苦く不快である。

### — 解 説 —

【来歴】 トロンは初め一五七〇—一六〇〇年間にポルトガルに派遣された宣教師 Manoel Tristao によって、土民

間で疾病に有効な薬草として報告され、ヨーロッパ人の間での応用はルイ十四世のころのバリの医師 Adrien Helvetius が、赤痢の治療に秘薬として用いて有効であることを実証したことから始まり、赤痢の治療のほか、吐剤 emeticum、去たん薬 expectans としての利用が拡大した。

【成分】 主アルカロイドは emetine  $C_{29}H_{40}N_2O_4$  [II] である。そのほかのアルカロイドとして cephaeline  $C_{28}H_{38}N_2O_4$ , psychotrine, o-methylpsychotrine, ipecamine, hydroipecamine, emetamine, protoemetine を含む。また、アルカロイド配糖体 ipecoside  $C_{27}H_{35}NO_{12}$  もみいだされている。アルカロイドは主として根の皮部に含まれる。

【薬理】 粉末の生理食塩液懸濁液をウレタン麻酔ウサギ又はネコに投入すると気道液分泌が増加し、これは迷走神経を介するものと考えられている。emetine 水溶液をウレタン麻酔ウサギに胃内投与したとき気道液量は増加の傾向が認められたが、静脈内投与では無効であった。

【適用】 トコン末の原料とする (トコン末)

トコン末 IPECACUANMAE RIDIX PULVERATA

吐根末 Powdered Ipecac

本品は「トコン」を粉末としたもの又はこれに「バレイシヨデンブ」を加えたものである。

本品は定量するとき、エーテル可溶性アルカロイド (エチメン  $(C_{29}H_{40}N_2O_4; 480.65)$  として) 二・〇〜二・三を含む。(注)

【性状】 本品は淡灰黄色〜淡かつ色を呈し、わずかに特異なおいがあり、鼻粘膜を刺激し、味はわずかに苦く不快である。

【極量】 一日〇・三<sup>g</sup>

〔注〕本品は劇薬であるため、エーテル可溶性アルカロイド含量は上下限をもって規定されている。

〔出典〕『第十一改正 日本薬局方解説書』広川書店、一九八六年。D—六七九～D—六八四。〕

〈註〉

本稿における主要な文献に関しては、左記の略号を使用する。

甲 エルヴェンウス家の人々の著作

Hat : Jean Adrien HELVETIUS, *Traité des maladies les plus fréquentes*, Paris, Laurent d'Houry et Pierre-Augustin Le Mercier, 1703.

He : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, Paris, Durand, 1758.

Hh : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, Londres, Société typographique, 1773, 2 volumes.

Hol : Claude-Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes*, éd. L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795, 14 volumes. (Georg Olms Verlagbuchhandlung, Hildsheim, 1967)

その他の中略号文献

Ch : Ian CUMMING, *Helvetius, His Life and Place in the History of Educational Thought*, London, Routledge et Kegan Paul Ltd., 1955.

Hn : HOFFER, *Nouvelle biographie générale*, Paris, Firman Didot Frères, 1857—1864, 46 volumes.

Ld : Louis LAFOND, *La Dynastie des Helvétius, les remèdes du roi*, Paris, Occitania, 1926.

Mb : Joseph MICHAUD, *Biographie universelle ancienne et moderne*, Paris, C. Desplaces, 1854—1865, 45 volumes.

Se : Jean François SAINT-LAMBERT, *Essai sur la vie et les ouvrages d'Helvétius*, dans HOL, tome I.

- (1) Robert MANDROU, *Louis XIV en son temps 1661-1715*, Paris, Presses Universitaires de France, 1973, pp.254-268.  
Ernest LAVISSE, *Louis XIV*, Paris, Librairie Jules Tallandier, 1978, tome II, p.116-179.
- (2) 井上幸治編『フランス史(新版)』山川出版社、一九六八年、二〇四—二二三頁。  
Marcel LE CLERE et al., *Paris, de la Préhistoire à nos jours*, Paris, Editions Bordessoules, 1985, pp.292-299.  
LAVISSE, op. cit., tom I, pp.550-558.  
ユネール・メチヴィエ著、前川貞次郎訳『ルイ十四世』白水社、五五—五九、八六—八九頁。  
なお、ヴォルテールも一六七九年以降の数年間に最大の評価を与える。  
「この時期に王は栄華の絶頂を極めた。統治を始めて以来つねに勝利し、包囲した拠点はかならず攻め落す。また、連合した敵をあらゆる領域で凌駕し、六年にわたってヨーロッパを震撼したあと、その裁定者とも鎮撫者ともなった。こうしてフランシユ・コンテ、ダンケルク、フランドルの半分を自国に併合した。そのうえ、彼の最大の強みと思われたのは、現に幸福を享受する民族の王であり、現に諸国民の模範と仰がれたことである。しばらくのち(一六八〇年に)パリ市庁舎は大王という尊称を恭しく彼に授与し、以後はすべての公共建造物においてこの尊称だけを用いるよう命じた。」  
VOLTAIRE, *Le Siècle de Louis XIV. dans VOLTAIRE, Oeuvres historiques*, Paris, Editions Gallimard, 1957, p.747.  
〈参照〉ヴォルテール著、丸山熊雄訳『ルイ十四世の世紀』岩波書店、一九七四年、第一巻、一八八頁。
- (3) Jean de LA FONTAINE, *Remerciement de Sieur de La Fontaine à l'Académie française*, dans LA FONTAINE, *Oeuvres complètes*, Paris, Editions Gallimard, 1958, pp.640-641.  
なお、哲学者タロード・アドリアン・エルヴェンヌスもルイ十四世の治世における人材の登用、学芸の開花を称讃し、十八世紀後半の専制政治や風俗の頹廃を慨嘆した。  
「蒙昧な時代がいくつも続くと、学芸という田畑はともすれば粗野となり、荒れ果てる。したがって、幾世代にもわたり学芸が開墾しないと、真に偉大な人物を産出できない。ルイ十四世の時代がそうであって、そこにおける偉大な人物がとくに傑出しているのは、彼らに先立つ多くの学芸者が学芸の道を切り開いたからである。歴代の国王に庇護されてのみ、そうした学芸も道を進むことができた」  
He, p.468. Hol, tome V, pp.80-81.
- (4) Ld, pp.19, 25.
- (5) Ld, pp.19-21.

- (6) Jacques HILLAIRET, *Dictionnaire historique des rues de Paris*, Paris, Les Editions de Minuit, 1963, tom II, pp.200, 692.
- (7) Michel Etienne TURGOT, *Plan de Paris*, 1739.  
LE CLERE, op. cit., pp.252-255.  
十八世紀後半の文献ではあるが、L・S・メルシエはボン・ヌフ橋の雑踏をつぎのように伝える。  
「この都会でボン・ヌフ橋は、人体における心臓と同じ位置を占めており、活動と交通の中心となっている。住民や外人の人波がたえず路上に寄せては返すので、探している人に出逢うには、ついで毎日一時間道通すれば、済むほどである」  
Louis-Sébastien MERCIER, *Tableau de Paris*, Amsterdam, 1732 (Starkine Reprints), Tom I, p.156.  
〈参考〉メルシエ著「原宏訳」十八世紀パリ生活誌「タブロー・ド・パリ」岩波書店 一九八九年、上、五三、六三—六九頁。
- なお、この邦訳に付せられた挿絵三枚は、ボン・ヌフ橋の情景をよく表している。
- (8) P.-E. LE MAGUET, *Le Monde médical parisien sous le Grand Roi*, Paris, A. Moine, 1899, pp.401-406.
- (9) DANCOUT, L'Opérateur Bary; dans DANCOUT, *Les Oeuvres de théâtre*, Paris, Compagnie des Libraires associés, 1742, tome VI, pp.8-11.  
また、モリエールの戯曲にもしばしば〈経験医〉あるいは〈いかさま医者〉が登場する。たとえば、「ドン・ジュアン」第三幕や「病は気から」第三幕を参照のこと。ただし、モリエールはルイ十四世の最盛期以前に世を去った。  
cf. Francois MILLEPIERRES, *La Vie quotidienne des médecins au temps de Molière*, Paris, Hachette, 1980, pp.115-124, 137-156.  
Ld, p.20
- (10) P. CROUSAZ-CRETET, *Paris sous Louis XIV*, Paris, 1922, tome I, pp.284-286.  
つぎの論文は革命直後における農村の「いかさま医療」を実証的に検討し、「学問的医学と民間療法を対置させる神話」を打破しようと試みる。(エリート医師)によって次第に周辺へ押しやられる〈いかさま医者〉や〈秘薬調合師〉を再評価することが、十七世紀研究にとっては一層必要であろう。  
ジャン・ビエール・グーベル、宮崎洋訳「病いを癒す術——一七九〇年のフランスにおける学問的医学と民間療法」『叢書歴史を拓く——アナル論文選三 医と病』新評論、一九八四年、一三七—一七三。  
J.-P. GOUBERT, *L'art de guérir. Médecine savante et médecine populaire dans la France de 1790*, *Annales E. S. C.*, 1977.

No. 5, pp. 908-926.

(11) LE MAGUET, op. cit., p.417-423.

因みにセヴァニエ夫人の「書翰集」よりこれら修道士に関する一文を抜粋する。

「料理人があなたに届けてくれるカプチン会修道士の薬液を、どうか失わないようにお願いします。それは身体のあらゆる苦痛、頭部の打撃やほかの打撲傷に、また耐え難いばかりの負傷にすら、驚くほど効くのです。お気の毒にも彼ら修道士は、エジプトに帰るため、すでに出発されました。医者たちは残酷であって、感嘆すべき公正な人物、奇蹟的な治療を本当に為し遂げる人物を、公衆から奪い取りました」(一六七九年一月二二日付グリニャン夫人宛書翰)

Marie de SEVIGNE, Lettre à Madame de Grignan, le 24 novembre 1679, dans, SEVIGNE, *Correspondance*, Paris, Gallimard, 1974, tome II, p.742.

(12) Jean BERNIER, *Histoire chronologique de la médecine et des médecins*, Paris, 1695, cité dans Ld, p.23.

(13) 行った判断においてはハファー編「新絵括伝記辞典」もミシエー編「古今世界伝記辞典」と軌を一にしている。

Mb, tome IV, pp.77-78.

Hn, tome V, p.262.

(14) Louis MOREL, *Supplément au grand dictionnaire historique*, cité dans Ld, p.24.

ただし、この文章は一七五九年に再刊されたモレリ編「歴史大辞典」の項目「エルヴェシウス」には見出されない。

cf. Louis MOREL, *Supplément au grand dictionnaire historique*, Paris, Libraires associés, 1759, tome V, pp.571-572.

(15) Ld, pp.24-26, Ch, p.2.

(16) アンドウ・ゼンバチ著「ブラジル史」岩波書店、一九八三年。三一頁。

ボイス・ペンローズ著、荒尾克己訳「大航海時代―旅と発見の二世紀―」筑摩書房、一九八五年。一四三―一四六、三三〇―三三二頁。

(17) ジャン・ド・レリー著「ブラジル旅行記」レリー、ロードニエル、ルシャル「フランスとアメリカ大陸」二、岩波書店、一九八七年。二〇八頁。

なお、新大陸の発見から約三百年のち、哲学者クロード・アドリアン・エルヴェシウスは左記のとおり誌した。

「インデアンは性格的な強さをなら持たない。彼らは商売の才覚だけを有する。彼らのためまきしく自然は己れの領域のすべてを造った。自然は彼らの土壤に貴重な物資で覆い、ヨーロッパ人がそれを買いに来る。だから、インデアンは富

裕で怠惰である。彼らは金銭を好むが、防衛する気概を有しない。軍事科学と政治科学に無知であるため、彼らはいつまでも下劣かつ哀れである」

- Hh, tome II, p.103. Hol, tome IX, pp.237-238.
- (18) フレデリック・モロー著、金七紀男、富野幹雄訳『ブラジル史』白水社、一九八〇年。三〇—三三五頁。  
ゼンバチ、前掲書。八一—八五頁。
- (19) Ld, pp.27-28. Ch, p.2. Hh, tome XXXIX, p.337.  
なお、『ブラジル博物誌』のなかでボンンの執筆部分には「ブラジルの薬物」という標題が付されている。  
Hh, pp.263-264.
- (20) 原文では当該の書名が『インド博物誌』と書かれているが、記憶の誤りと思われる。  
Ld, pp.28-29, 30-31.
- (21) Nicolas LEMERY, *Traité universel des drogues simples*, Rotterdam, Jean Hofhout, Paris, 1727, pp.280-281.  
Ld, pp.28.
- (22) C・H・ラウォール著、日野巖、久保寺十四夫訳『新訳 世界薬学史』科学書院、一九八一。一三一—一三六頁。
- (23) 川喜田愛郎著『近代医学の史的基盤』岩波書店、一九七七年。上、三九三—三九六頁。
- (24) ラウォール、前掲書。一三四—一三五頁。
- (25) 小川政修著『西洋医学史(決定版)』形成社、一九七九年。六一—六一四頁。
- (26) 川喜田愛郎、前掲書。三二〇—三三三頁。  
Andrew CUMMING, Thomas Sydenham: epidemics and the 'Good Old Cause' in *The Medical revolution of the seventeenth century*, edited by R. French & A. Wear, Cambridge, 1987, pp.164-191.
- (27) Le MAGUET, op. cit., pp.105-106.  
ラウォール、前掲書。一三四。
- (28) SEVIGNE, Lettre du 8 november 1680 à Madame de Grignan, dans SEVIGNE, op. cit., tome III, pp.56-57.  
因みにラ・フォンテーヌもこの新薬に感服し、一六八二年に長文の頌詩『キナ樹皮の詩』を発表した。彼の医学的関心はラ・サブリエール夫人の文芸サロンで賞醒したと言われる。なお、当時のもっとも魅力的な女性に数えられるラ・サブリエール夫人は、この時期に愛する男の死に見舞われ、自己の苦悩を和らげるため、病める者への奉仕に専念していた。ラ・

フォンテーヌ「キナ樹皮の詩」の一節をここに掲げる。

暗礁に取り巻かれた黄金を、われらは追い求める。  
故郷の山奥まで、われらの手はそれを探しまわる。  
他方われらのもとに、キナ樹皮はみずから現れる。  
われらが崇めるものより、千倍の価値を持って。

とはいえ一世近く、これに報いもしなかった。

数年前からわれらは、ようやくこれを愛顧しかけた。

どれほどの反響をこれが呼んだか。われらの殿堂がどんな煙を立てるか。

キナ樹皮の贈物に、どのような称讃を捧げるか。

治癒された数多くの事例を、ここで言い尽くすことはできない。

高貴な患者の名だけ、いまは挙げよう。

貴重な頭脳を、どれほどこれが救ってくれたか！

LA FONTAINE, Poème du quinquina, dans LA FONTAINE, op. cit., p.75.

- (29) Kenneth DEWHURST, *John Locke (1632-1704), Physician and Philosopher, A Medical Biography, with an edition of medical notes in his journals*, London, The Wellcome historical Library, 1963, pp.58-60, 227-230.

田中正司、平野耿編『ジョン・ロック研究』お茶の水書房、一九八〇年、四二―五四頁。

なお、ロックにおける認識論と医学の関係を究明することは、従来等閑にされた重要な課題である。

- (30) John LOCKE, *Journals*, dans DEWHURST, op. cit., pp.202, 206-207.

また、後年ロックは施療の際イベカ吐剤も用いた。一六九八年の日記にそうした記録が見出される。

【一六九八年九月二日】

「第一にイベカキユアナの樹根一ドラクマ強の用量で吐かせる。第二に目脂が出るまで、上質の水銀甘露酒を幾度も飲ませる。第三に普通の飲料水を与える。こうした療法で（るいれき）を治癒させた、とウッドワード博士も主張する」

*Ibid.*, p.294.

- (31) *Id.*, pp.74, 98.

- (32) *HAT*, pp.205, 207.

- (33) Ld. pp.29-30.  
 「バダヴィアの総督である近親のひとりから、彼〔祖父エルヴェシウス〕はイベカキュアナの用法を教わった」サン・ラ  
 ンペールによる小伝『エルヴェシウスの生涯と著作に関する試論』にはこのように誌されている。(Se. p.2.)
- (34) Ld. pp.30.  
 なお、一七〇〇年に現れた文献には、これと異なる記述がある。「アメリカから戻ったひとりのコルドリエ派修道僧が、  
 これを沢山自国に持ち帰り、彼〔曾祖父エルヴェシウス〕の診察を受けた際に、それを贈呈して、どのように用いるかも  
 教えた」この記述にラフォンは強い疑義を示している。(Ld. p.30.)しかし、十七世紀ブラジルにおけるオランダの植民地  
 経営を考えると、イベカキュアナに関するより詳しい情報が、マウリシアからアムステルダムへ流れた可能性は否定でき  
 ない。
- (35) Ld. p.26.  
 (36) Ld. p.34.  
 (37) Ld. p.34.  
 (38) モリエール『恋は医者』に登場する医者トメスは、侍医ダカンを摸したものとされる。なお、この戯曲の第二幕では（い  
 かさま医者）も己れの秘薬を喧伝している。  
 「デ・フォルナンドレス氏」 勿論です。なにが起ろうと、形式をつねに守ることが必要です。  
 「トメス氏」 私については、友人同士でないかぎり、その点きわめて厳格にしております。ある日私たち三人と余所の  
 医者ひとりが診察に呼ばれましたが、そうした事態が収拾されぬ以上、私は診察を見合わせました。意見を述べ合うこと  
 に、我慢できないからです。家人は手を尽し、病状は急を要しました。しかし、私が譲らないので、そのような異議申し  
 立ての間に病人は潔く死にました。  
 「デ・フォルナンドレス氏」 それは上出来です。生き方と己れの未熟さを人々に自覚させましたね。  
 「トメス氏」 死者は死者であり、影響を与えません。だが、形式が無視されれば、医師団体すべてに大きな被害を及ぼ  
 します。
- MOLIERE, L'Amour médecin, dans MOLIERE, *Oeuvres complètes*, Paris, Gallimard, 1971, tome II, pp.107, 111.  
 モリエール『恋は医者』鈴木力衛訳『モリエール全集』中央公論社、一九七五年。第一巻、一七八、一八三―一八四頁。  
 Ld. pp.34-35.

- (40) Louis MORERI, *Le Grand dictionnaire historique*, Paris, Les Librairies associées, 1759, tome V, p.572.
- (41) HAT, pp.262-265.
- (42) Ld, p.20.  
 コルヌールは植物学と医学を發展させるため、パリの植物園をみずから視察し、それを改組した。
- Luce MURAT, *Colbert*, Paris, Fayard, 1980, p.195.
- (43) Ld, p.35.
- (44) Ld, p.35-36.
- (45) Archives nationales, O<sup>3</sup>31, folio 136 B, cité dans Ld, p.36.
- (46) André PECKER, *La Médecine à Paris du XIII au XX siècle*, Paris, Editions Hervas, 1984, pp.117-122.
- (47) Marcel FOSSEVEUX, *L'Hôtel-Dieu de Paris du XVII au XVIII siècle*, Paris, Berger-Levrant, 1912, pp.323.  
 なお、この書物ではジャン・マヌリマンによるイペカ吐剤の投薬が代表的な臨床実験として紹介されている。
- (48) Ld, p.38.
- (49) HAT, pp.266-268.
- (50) Ld, p.38. MORERI, op. cit. tome V, p.572.
- (51) Archives nationales, G<sup>7</sup>716, cité dans Ld, p.38.
- (52) Ld, pp.42-46.  
 伝染病の特効薬は万余の人々に多大の利益をもたらす。のちに哲学者エルヴェシウスは発明発見の意義をつぎのように述べた。  
 「練を塩漬けにして、樽に詰める秘訣を創案したギヨーム・ブユッケルトのためオランダ人が銅像を立てた。彼らがそうした栄誉を授けたのは、発明に天才的な力を要したからではなく、そのような秘訣が貴重であり、また国民に恩恵を与えるからである」
- He, pp.122-123. Hol, tome II, pp.164-165.
- (53) Archives nationales, Rir 95, folio 949-950, cité dans Ld, pp.42-45.  
 この「専売特認書」は一七〇三年に更新され、専売の期限がさらに一五年間延長された。